

(1) 2022年7月6日(水)1面 掲載

◆産大レクチャー ア・ラ・カルト<177>

卓球・ダブルスの不思議 一小黒 裕二

産大レクチャー
ア・ラ・カルト <177>

1988年のソウル五輪より卓球が正式競技となり。東京大会では新種目、混合ダブルスが追加されました。2021年7月26日、この種目において水谷隼・伊藤美誠ペアが最初の金メダルを獲得したことは記憶に新しいことです。伊藤選手は相手男子の打球を物ともせず、男子に対しても効

果的な返球が見事であり、水谷選手のサウスボレーを活(い)かしたプレーは圧巻でした。ダブルスは1926年ロンドンの世界卓球選手権大会以来、ほとんど変わらないルールで行われているようであり、全員に公平でない不思議なところがあります。私自身、ルールを覚えてから何の違和感もなくプレーをし

ていましたが、卓球独自のところを三つあげてみたいと思います。

まず一つ目は、サーブ

スを自陣の右半面にパウ

うか。一般的にサウスボレーがレシーブ時には有利であると言われています。

数のほうが多くなることも頭に入れておかなければなりません。

ペアの4人が順番に2点ずつサーブを交代しながら合計10回ずつのサーブ、レシーブをします。

考えられます。その工夫を楽しむのも卓球の醍醐味(だいごみ)かもしれません。

卓球・ダブルスの不思議

小黒 裕二

右半面へと対角線にパウ

混合ダブルスでは男子の打球を男女どちらが受けるのかを考慮しなければなりません。また、最終ゲームではどちらかが5点になると打球順がかわるため、後半のポイント

です。2001年のルール改正により卓球競技が21点から11点先取となつたことで生じたものです。

ペアの4人が順番に2点ずつサーブを交代しながら合計10回ずつのサーブ、レシーブをします。

ペアが必ずしも勝つとは限らない」「同じ相手との対戦でもやり方次第で勝敗が変わる」と言われることが多いのはルールからも納得できます。

(文化経済学科講師) 毎月1回掲載

(2) 2022年7月5日(火) 2面 掲載

◆地域に学び地域をおこすー実践活動レポートー

卒業生から学ぶこと～キャリアデザイン～

【平成30年11月4日第二報徳物認可】

「新潟大学」 地域に学ぶ 地域をおこす

ー実践活動レポートー

卒業生から 学ぶこと

～キャリアデザイン～

1年生のキャリア科目「キャリアデザインⅠ」(橋本康正非常勤講師)では、本学を卒業後に県内企業で活躍する卒業生を招へいし、在学中の就職活動や学生生活の過ごし方、現在の業務内容や仕事の魅力などを聞くことで、進路選択の幅を広げるとともに、キャリアプラン形成の一助としている。今年度は社会人2

年目となった4名の卒業生が来校し、1年生60名の前で熱いメッセージを送ってくれた。

卒業生の一人に、ロングラン(市内錦町)で支援員として勤務する吉井大樹さんがいた。ロングランは、幼児期からの発達を支援し、障がいのある人の一生涯の暮らしを支援し続ける事業を主な仕事とする社会福祉法人だ。吉井さんは小千谷市の出身で、在学中は卓球部の主将としてチームをけん引し、食品製造の企業のインターンシップに

も参加した。しかし、「何か違和感があったこと、家族の勧めもあつて一人と膝を交えて関わりをもてる」ことなどから福祉業界を選択した。

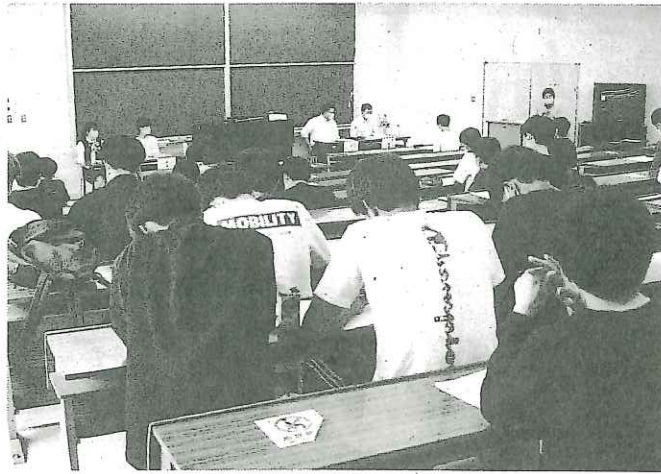
現在の仕事について「障がいと言っても十色で、個性も当然異なります。その日の表情や態度を見ながら対応も変えています。間近で子どもたちと接する中で、利用者が増え成長し、自立への階段を昇っていると感じた時に、この仕事を選んで良かったと感じます。誰にとっても住みやすい街づくりに携わっているという自負もあります」とそのやりがい

を語る。
講義を聞いていた栗林陽華さん(1年)は、「母が福祉の仕事をしている

ので、福祉には興味があったのですが、吉井さんの話を聞き、人と向き合う仕事に就きたいと改めて思いました」と話してくれた。講義を聞いた学生の多くが、卒業後を見

据えた大学生活の過ごし方の大切さを感じた。パトンは確実に受け継がれている。

(同大学地域連携センター)



(3) 2022年7月25日(月)2面 掲載

◆風鈴短冊 涼 奏で

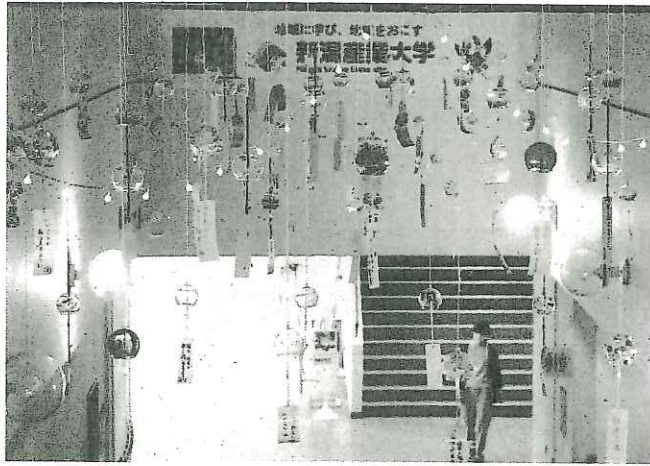
風鈴短冊 "涼"奏で

新潟産大

新潟産大校舎の吹き抜けに色とりどりの風鈴100個が飾られ、涼しげな音色を響かせている。風に吹かれて時折、メロディのような音も奏でる。同大は七夕に合わせて、1階学生ロビーに竹を設置し、学生たちが願いごとを書いた短冊を飾ってきた。今年は七夕飾りに加え、厳しい暑さの中、も景観や音色からより涼しさを感じてもらえるようにと、新たに風鈴10

0個を用意。緑色の風鈴は、スイカに見立ててしま模様を描くなど思い思いに絵付け。つり下げ短冊に「良いことがありますように」「楽しく一年が送れますように」「これからの人生を楽しみたい」などの願いを書いた。風鈴短冊の展示は9月10日まで。

同大入試広報課では「新型コロナウイルスの影響で学生生活にも制限がある上、連日猛暑が続いている。せめて夏の樂風を揺れ、涼しげな音を奏でる『風鈴短冊』」
|| 新潟産大



しい思い出の一つとなるように、これからも毎年『風鈴短冊』を実施していきたい」と話した。

(4) 2022年7月26日(火)2面 掲載

◆地域に学び地域をおこすー実践活動レポートー
社会人選手に学んだこと～海で水球イン柏崎～

「新潟県水球選手」
地域に学び
地域をおこす

ー実践活動レポートー

社会人選手に
学んだこと
～海で水球イン柏崎～

毎年恒例となった「海で水球イン柏崎」イベントが、今年も9日に柏崎港で行われた。市役所の水球のまち推進室の方々(主担当・木村栄記さん)市役所勤務。本学卒業生(Ⅱ)が、漁港の方々と打ち合わせをし、海の水球コート設置は今年も本学水球部員で行った。

2015年よりブルボンウォータースポーツクラブ柏崎と統合し、同クラブのメンバーとして活動している。同クラブに所属する小学生から社会人までの男女選手150名程度のうち、40名強(約3割)が本学男女の選手であり、大学区分はクラブ内で最も人数が多い。

人数の多い本学水球部員は、ブルボンウォータースポーツクラブ柏崎のメンバーとしてさまざまな地域活動を行っている。一方で、地域活動で多くの市民の方に喜んでもらえるには何をしたらよい

か、学生にとってハードルが高く感じることがある。そんな時、社会人選手から学生にアドバイスしてもらえることが多々ある。

イベントにプレイヤーとして参加した山口巧喜さん(4年・柏崎市出身)は、「下級生の頃はコート設置や受付業務に頭がいっぱいで周りを見る余裕がなかった。イベントでの社会人選手のプレーについても、観客目線で見ただけであったように思う。今年はプレーヤーとして参加することが決まり、作成されたシナリオを見て、社会人選手とリハーサルし、市民の方にご喜んでもらうかということをして、社会人選手からアドバイスをもらった。東京五輪に出場した志水祐介選

手、棚村克行選手のアドバイスは特に的確で、とても勉強になった」と振り返る。

山口さんは小学生の頃、社会人水球選手による出前水泳授業を受けて水球を始めた。「社会人

選手から学んだことを地域活動に活(い)かしたい」と山口さんは笑顔で語った。

産大水球部監督・佐々木洋輔
(同大学地域連携センター)

